The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	物語論への一視点
Author(s)	伴, 利昭
Citation	語文. 1987, 49, p. 1-9
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68766
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

物語論への一視点

伴　利昭

一

王朝の物語が盛んに書かれだし盛行するにつき、それらの物語がどのような成立の基盤をもっていたか。前代からの伝統を受け継ぎながらどのような新しい精神に支えられて変成していったのか。個々の作品を越えての時代の流れが物語の中によみとれないか。そのような視点のなかでこの論をすすめてみたい。

すでに、前代からの王朝物語への影響については昔語りや伝承文学等の関係から、その影響史を中心として種々考えられてきた。また、個々の作品の中における文学性やその作品の特性については、それぞれの作品研究の中において展開されてきたといえる。しかし、前代からのものにどのような新しい要素が加わって、この時代の新しい文学の動きとして成長していくのかという面からの追求は、それほどされてきたとはいえない。当時の人々が物語をどのようにとらえようとしていたか、この点が明らかになれば、この問いに答える柱の一つになるであろうが、物語論といえるほどの議論が展開されていたわけではない。しかし、断片的ながら物語についての論及が作品の中で孤立的に展開はされている。物語論として系統的に発展することはなかったが、物語はかくあるべしの論は一見脈絡のない中に散見する。当時のもの言いの中に物語論としてまとまった形にあとづけることはできないかもしれないけれども、その中に新しい時代の文学への一つの共通する足並みがあるのではないか。過去の伝統的なものを受け継ぎながら新しい時代の精神を加えつつ物語が成立していった、そのような流れを認めることができるのではないか。わたくしはそのような観点に立って当時の作品の中にみられる物語への議論を再点検してみたいと思う。それはまた、物語論として整理してみる試みに通じるとも思うのである。

二

物語に対する截然たるもの言いは、王朝作品の中では『源氏物語』螢の巻の物語論が唯一と言ってもよい。今ここで紫式部の物語論すべてを考察するのではなく、必要に応じての論点を抄出し検討してみたいと思う。

まず、紫式部は従前の物語がどのような実態であるのかについて

は、次のようなとらえ方をしている。

さまざまにめづらかなる人の上などを、まことにやいつはりにや、言い集めたる中にも、わが有様のやうなるはなかりけりと見給ふ。住吉の姫君の、さしあたりけむ折は、さるものにて、今の世のおぼえもなほ心ことなめるに、主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思し准へ給ふ。（『源氏物語』螢の巻　朝日古典全書による。以下同じ）

源「あなむつかし。女こそ物うるさがらず、人に欺かれむと生れたるものなれ。ここらの中にまことはいと少からむを、かつ知る知る、かかるすずろごとに心を移し、はかられ給ひて、暑かはしき五月雨の、髪の乱れるるも知らで、書き絵ふよ」とて、笑ひ給ふものから、また、源「かかる世の故事ならでは、げに何をか紛るることなきつれづれをなぐさめまし。さてもこのいつはりどもの中に、げにさもあらむとあはれを見せ、つきづきしく続けたる。はた、はかなしごとと知りながら、いたづらに心動き、らうたげなる姫君の物思へる見るに、かた心つくかし。

螢の巻の論は、物語は虚であるけれども人間の事実を述べるものだという主張がその根幹をなしているのであるが、その核心に言い及ぶ前段が右のような文章である。これを必要に応じて整理すると、従前の物語は女のつれづれを慰める作り物語である（げに何をか紛るることなきつれづれをなぐさめまし。）、現在現実の人間と物語の人物とを同一の次元でとらえようとしていること（主計頭が、ほとほとしかりけむなどぞ、かの監がゆゆしさを思し准へ給ふ。）の二点が挙げられる。式部自身の物語に対する考え方は、主として自らの作品『源氏物語』を念頭におきながら、虚構の作品の中に人間の真実を描くという考えにつきるのであるが、それ以前の物語の実態は、そこまでに至ることなく女、子供の心を遣る慰みものにとどまるのが実態であった。しかし、そのような作品であれ、これを受けとめるに、現実の人間と作品上の人間とを同じように扱い、受けとろうとするところの見られる点に注意しなければならない。作品の出来映えはともかく、物語を現実の人間界と見る受けとめ方に、この時代の特性が出ているように思われる。昔あった過去の出来事ではなく、現在の人間とみなして受けとめようとする姿勢である。吉岡曠氏は、物語の草子地を検討され、物語を語る作者の位置が、「今は昔」の「時代小説」から、冒頭・結末の二文にだけあらわれるたてまえに変化し、源氏物語において「今は昔の物語」から「今物語」[注1]へ、「時代小説」から「現代小説」へと転換したと論証せられた。物語文学が前代からの影響を受けつつ、新しい展開をし、熟成していくという視点からして興味ある、また首肯されるべき論考である。吉岡氏は、「いづれの御時にか」という「今は昔」に準ずる書き方をしている源氏物語を草子地からみて「今物語」と認定された。同様のことは、「今は昔、中納言なる人、女あまた持給へるおはしき」ではじまり、「昔の阿漕は今は典侍なるべし。典侍は、二百まで生けりとかや。」でおわる『落窪物語』においても同様の事情である。昔語りの語りの形式を受け継ぎながら、その内容が現代小説の書きぶりに変じているといえる。また、話の描き方や構想の展開の仕方の中からも同様のことが窺えることをかつて論じたことがある。[注2]ここでみた引用文は、物語の享受の姿勢においても物語を現代視する方向にあることを示している。

源「姫君の御前にて、この世馴れたる物語など、な読み聞かせ

給ひそ。みそか心つきたるものの女などは、をかしとにはあらねど、かかること世にはありけり、と見馴れ給はむぞゆゆしきや」と宣ふも、こよなし、と対の御方開き給はば、心置き給ひつべくなむ。上紫「心浅げなる人まねどもは、見るにもかたはらいたくこそ。空穂の藤原の君の女こそ、いとおもりかにはかばかしき人にて、過なかめれど、すくよかに言ひ出でたるしわざも、女しき所なかめるぞ、ひとやうなめる」と宣へば、源「現の人もさぞあるべかめる。……

源氏は、「世馴れたる物語」をむすめの教育によろしくないというし、紫上は、空穂の君の藤原の女を自らの生きざまに照らして批判している。

紫式部の虚をもって実を表すという理論は今日にも通用する考え方でもあり、式部の到達点の高さを示すものであるが、その考えが物語論の中心としてこの時代に定着したわけではない。むしろ、式部個人のぬきん出た理解の高さとして存在し、一般化するには至らなかったといえるであろう。この虚実の論の前段に展開せられた物語の現代視の姿勢の方を今ここでは注目しておきたい。

三

『源氏物語』の成立後、それより程経ぬ鎌倉初期に、『無名草子』は最初のまとまった物語評論を展開している。王朝の物語がどのように評価され、享受されていたかを知るには、この草子をまず第一に取り挙げねばならない。物語論との関わりからこの草子の批評の特性を私は次のようにまとめてみた。[注3]

1、物語の歌人的認識

(イ)物語の興あるふしぶしは、その興の美的内容によって、「あはれなること」「いみじきこと」「いとほしきこと」等その種類は異なるが、そのいずれもに和歌を充てることが多い。また「歌よし」「歌わろし」が物語評価の一基準として用いられるなど、物語における和歌の重視に強い特徴が認められる。

(ロ)物語は言葉を媒体とする文学であることは自明のことであり、言葉の果たす役割が大であることはいうまでもない。しかし、「言葉違ひ」を物語評価の尺度としてこれほど明確に位置づけたものは無名草子以前にはない。心、詞、姿で和歌を把える歌人の見方が物語観にも及んでいる結果ではないかと推測してみた。

2、物語の場面的言及

物語の趣きとして作者が把える一面に、「見どころ」「ふし」の概念がある。両者に広狭の差はあるが、物語を全体として見るのではなく、孤立的な局面、場所でもって享受するところに特徴がある。これは無名草子特有のものではなく、平安朝においてよく見られる認識の方法をうけ継いだものと考えられる。

3、物語の全体的認識

無名草子の人物論は、登場人物の人格、人間性を論ずる傾向がつよく、断片的な言動で論ずることは少ない。主人公の場合など物語全般を通じてはじめて人間性が形成されるのであり、そのような点を論じようとする態度は物語の全体的な把握の一つのあらわれとみることができよう。不十分なものであるが、物語全体を見とおした批評などない当時にあっては、それなりに評価できるところがある。

4、物語の現実性重視

物語に真実味、現実性を求める。「まことしからぬ」物語を否定し、古代物語を斥けようとする。登場人物を実在の人間に準じて受けとめようとする傾向がつよい。

このうち3と4について前項との関わりでもう一度みておきたい。

『狭衣物語』について『無名草子』作者は、「さらでもありぬべきことども」としていくつかのことを挙げ、「まことしからず」として難じている。「まことしからず」は現実味、真実味を欠くことを意味すると考えられるが、その対象にあげられているのは、笛の音による天人の天降り、普賢菩薩の示顕、賀茂大明神の夢の告、斎院の神殿鳴動、大将の即位の五つである。前の四つは、超自然的、非現実的な現象であり、古い物語や伝承にはよくとりあげられるモチーフである。最後の狭衣大将の即位は、古代の出来事ではなく現在の事象であるが、あまりにも理りを欠いている。後の文での無名草子の説明は、狭衣は皇孫で、父の代から姓を賜わった身であり、そのような人物が帝位につくことはあり得ない。源氏が准太政天皇になったことを真似た設定であろうが、あまりにも道理を逸している、というのである。

このように物語に真実味、現実味を求め、「まことしから」ぬ物語を否定し、古代的物語をしりぞけようとする考え方は、王朝の物語の展開の軌跡をも暗示するようで興味深いことである。源氏物語に対しては、理想的作品としてまことしからぬ作品としてはみることはない。というよりも作り物でありながらも現実に存在する世界のように作者は登場人物について批評をしていく。それらは「めでたき人」「好もしき人」「いみじき人」「いとほしき人」といった主観的好悪を示す評語でまとめながら書き進められる。たとえば、末摘花が好もしき人だというので、皆さんは私を憎まれるけれど、彼女が心強く源氏を待ち、遂には再訪を得るところなど何ともすばらしいという。作者自身の好みを前面に出した判断で、主観的批評に止まる人物評だともいえるのである。批評の性質という点では、その通りであるが、これらの人物評のなかからいくつかの特徴がよみとれる。

一つは、「心用ゐ」とか、「心ばへ」、「心深さ」、「人ざま」、「人柄」といった根拠で人物評がなされている場合が多いことである。登場人物の言動から気だてや心配りをよみとり、作者の好悪の基準に照らして批評していく。作者と同じ実在の人間であるかのように、登場人物の心根をさぐりつつ、批評を加えていくのである。

第二には、登場人物の行動、考え方、生きざまを、作者の立場で非難しようとするところである。たとえば、源氏が晩年に女三の宮を正妻に迎えたこと、また女三の宮とあやまちを犯した柏木を死に追いやったことはけしからぬことだと難じるのである。女三の宮降嫁事件、柏木密通事件が源氏物語の中で果たす役割など考慮の外で、作者は源氏の人間としてのあり方、生き方を問うのである。文学として見ずに、人間批評をなそうとするかの如きである。

このような無名草子の批評は登場人物を実際の人間に準じて考え、自らかくあれかしと思う人間像に照らして評する人物論とでもいえよう。

物語についての詳しい言及は主としては『源氏物語』と『無名草子』との二つにつきるのであるが、[注4]その中から物語の現代化・現実視という一つの方向をとり出してみたのである。物語を正面から論

じたこの二つの論の中に物語と現代化という問題がはっきりと提示されていると考えるのである。このような方向を、作り物語が登場する段階で最も大きなバックボーンをなしたもの、伝承されてきた昔物語に対する新しい時代の側からの息吹として注目してみたい。たとえば、『竹取物語』の根幹は、伝承されてきた昔物語であったが、そうした昔物語が新しい時代の息吹の中で姿を変えていく。その一つの表れとして現代化、個性的なものの付与という形をとるのではないか。そうしたなかで昔物語を嘘であり、荒唐無稽である、とする見方が出てきているのではないか。そらごと、「まことしからず」という認識の仕方が出てきているのではないかと思われる。『落窪物語』なども、継子いじめの型をかたちとしては借りている。しかし、新しい、当代の構想みたいなものが、草子地の中に出てくる。[注5] 現代的な主題性が新たに浮かびあがってくる。このように前代から受け継いだもの、新しい時代の精神として付け加って行くものという関係の中で、「現代」という問題が浮上してくると思われる。そのような問題として前項の源氏物語螢の巻の論、この項の無名草子の論をとらえてみたい。

四

次に『枕草子』の場合をみておきたい。枕草子の中で物語について評したところに次のような例がある。

物語は住吉。うつほ。殿うつり。国ゆづりはにくし。むもれ木。月待つ女。梅壺の大将。道心すすむる。松が枝。こま野の物語は、ふるかはほりさがし出でて持て行きしがをかしきなり。ものうらやみの中将、宰相に子生ませて、かたみの衣など乞ひたるぞにくき。交野の少将。（二百一段　日本古典全書、以下同じ）

こま野の物語は、なにばかりをかしきこともなく、ことばも古めき、見どころおほからぬも、月にむかしを思ひ出でて、虫ばみたるかはほり取り出でて、「もと見しこまに」といひてたづねたるが、あはれなるなり。……交野の少将もどきたるおちくぼの少将などはをかし。昨夜、一昨日の夜もありしかばこそ、それもをかしけれ。足洗ひたるぞにくき。きたなかりけむ。……（二百七十六段）

右について、野口元大氏が、

この落窪も、さきのものうらやみの中将も、共に時間の軸にそって展開されるプロットが問題にされず、そこから切り離された特定の場面だけが、をかしとも憎しとも批評の対象となっているのは特徴的である」（「枕草子の源泉――物語文学」『枕草子講座』所収）

と説かれたように、ある場面をもって物語を把えている点がまず注意されるのである。野口氏は更に「特定の場面」を「無時間性」と規定され、「無時間的なるが故に永遠化」されると意味づけられたのであったが、わたくしはこの問題について物語をどのように受けとめているかという点から、物語受容史という観点から検討を加えておきたいと思う。

ここに物語としてとりあげられた殆どの作品が今日伝わらず、場面、興趣中心の短篇作品も存在したのかも知れないが、少くとも宇津保物語や落窪物語はそうしたものではない。そういう長篇作品をも、おちくぼの少将が昨夜、一昨日の夜に続いて雨の中落窪姫を尋ねるところをもって、をかしと評しているのである。こま野の物語

は『月にむかしを思ひ出でて、虫ばみたるかはほり取り出でて、『もと見しこまに』といひてたづねたる」があはれだという。その評価の拠りどころを清少納言は「見どころ」ということばで表現しているのであるが、他の評言の附されていない物語も、「見どころ」のある物語と考えているということになる。具体的にどのような「見どころ」があるかはともかく、筋があり、登場人物の人生があり、総じて時間継起的な物語を、「見どころ」という一断面でもって評しているということになる。

ところで、この問題は枕草子約三百段中の一部であって、他の段々とももちろんかかわりを持っているはずである。作者が物語評ということを直接の目的として、独立して書いた一文でないことは自明のことである。枕草子中の一段という側面からも見なければならないであろう。

さて、その見どころの一端を考えてみるに、たとえば、作者の自讃めいた段は、自分自身がをかしと思うところがもっとも端的に顔を出す場合が多いであろうから、その一、二をみることにする。

七十八段に頭中将斎信が清少納言のことを誤解し、仲違いの折、文をおくって清少をためすエピソードが語られる。よく知られた話しであるから、詳細は省くが、頭中将が「蘭省花時錦帳下　末はいかに、末はいかに」と言ってよこしたのに対し、「これが末を知りがほにたどたどしき真名書きたらむもいと見苦し」と考え、末の句の「廬山雨夜草庵中」をふまえ、かつ公任の歌を借り用いて、「草の庵をたれかたづねむ」と返り事するところが眼目である。「草の庵云々」の句の内容そのものがすぐれているというより、蘭省花時の末の句を「知りがほ」に書くことをさけての工夫がすばらしい。この清少納言の着想のすばらしさに人々は感嘆し、頭中将の心も元に復すのである。枕草子の中では長い部類の章段に属するが、この段の要諦が清少納言の趣向、機智にあることはあきらかであろう。

二十一段清涼殿の丑寅の隅の、の段の場合はどうかを考えてみよう。この段は中関白家のまだ隆盛の時、春日の清涼殿にくりひろげられる貴紳の雅びやかな生活が描かれるのであるが、ここでも清少納言の面目をおこす逸話が語られる。中宮が硯を取りおろして、「とくとく。ただ思ひまわさで。難波津もなにも、ふとおぼえむことを」と女房たちに思い浮かぶ古歌を書くよう求められる。清少納言は「年ふれば齢は老いぬしかはあれど花をし見ればもの思ひもなし」という歌を「君をし見れば」と書きなしてさし出すと、中宮は「ただこの心どものゆかしかりつるぞ」とおよろこびになる。「春の歌、花の心」などこの場にふさわしい古歌を書き連ねた上蔵の後で、ただ一字「君」と書きかえて一ふしひねった清少納言の機転を、「この心ども」がゆかしかったのだと言われるのである。先の段やこの段にみえるような機智や着想の妙に清少納言は得手ていたということが、できるであろう。そういう清少納言がもてはやされる場を、どう見るべきであろうか。

清少納言が機智に富み、おもしろい着想力を持っていたと述べたのであるが、それは清少個人の特性であるにとどまらず、当時の人々に喝采をもって受けとめられたことにも注意をはらうべきである。七十八段で「草の庵をたれかたづねむ」という返事をみて、人々はどよめき、清少納言を「どうして立派な人物と思っていたのだろう、つまらぬ人間だ」とまで思っていた頭中将に、「やはり思いすてきれないすばらしい人だ」と考えなおさしている。人々は「先々に、

語り伝うべきことだ」といい、天皇、中宮にまで聞こえ、殿上人たちは扇に「草の庵」の句を書きつけているという。大変なさわぎである。

二十一段の場合、中宮は「君をし見れば」の歌を御覧になって、円融院の時、父道隆の同じような例を引き合いに出されている。

ただいまの関白殿、三位の中将ときこえけるとき、潮の満ついつもの浦のいつもいつも君をば深く思ふはやわが、といふ歌の末を「頼むはやわが」と書きたまへりけるをなむいみじうめでさせたまひける。

このように、清少納言の機智、着想は当時の人々が、同じように求めていたものであり、時代の潮流ともいうべきところがあったと考えてよかろうと思う。和歌の世界においても趣向、着想が大きな意味をもっていた時代である。たとえば、この頃三舟の才としてきこえる公任の逸話の歌を考えてみても、このような事情をうかがい知ることができる。『大鏡』によれば、当代一流の人々を集めた三船（作文の船、管絃の船、和歌の船）の遊びで、公任は和歌の舟を選んで乗り、次の歌を詠んだ。

をぐら山あらしの風のさむければもみぢのにしき著ぬ人ぞなき

（『拾遺集』では初句「朝まだき」）

『大鏡』はこの歌について「申しうけたまへるかひありて、あそばしたりな」と評しているが、どういうところがすばらしいのであろうか。小倉山や嵐山から風に吹きおろされる紅葉が舟遊びの人々にちりかかっているという景観を詠んでいるのであるが、その、人々にちりかかる紅葉を「もみぢのにしき著る」と発想し、趣向したところが、第一の手柄であろうと思う。紅葉のちりかかる光景を土台としながらそれを「もみぢのにしき（を）著る」と見たてるところがなかなかしゃれている。そういう見立てや着想に腐心するところは、先にみた清少納言の「草の庵」や「君をし見れば」の苦心にも通じている意識だと思うのである。「草の庵」の句を聞いて、大さわぎの感心をする宮廷人士の姿を見ていると、この意識は単なる和歌の技法上の問題ではなく、物の見方、考え方にまでかかわっているとさえ思われる。

このような考え方が、「見どころ」をもって物語をみようとする考え方に通じていくのであろうと思われる。それは時代の精神の反映という側面をも有している。

五

『枕草子』の「見どころ」の論は、『無名草子』にも受け継がれている。「見どころ」の具体的な中味は異なるが、とらえ方は同じである。『無名草子』の源氏物語巻々の論では、どの巻が「すぐれて心にしみてめでたくおぼゆる」かを述べるのであるが、たとえば、「夕顔」は「一筋にあはれに心苦しき巻にて侍るめり」と評する。その「あはれに心苦し」という作者の印象は巻全体から受ける印象を述べているように受け取られるが、他の巻の記述を見ると、「見どころ」というある場面の印象が評価の中に大きな位置を占めていることに気づくのである。

(イ)「帚木」の雨夜の品定め、いと見どころ多く侍るめる。（新潮日本古典集成25頁）

(ロ)「若菜」の上下、いとうるさきことどもあれど、いと多くて、見どころある巻なり。（26頁）

(ハ)「野分」の朝こそ、さまざま見どころありて、艶にをかしきこと多かれ。（26頁）

右の如く、「見どころ」という視点で巻の中味をおさえている。巻を考えるにあたって、まず「見どころ」という興ある場面を基準とし、その印象のつみ重ねが巻を評することばになっているように見える。少くとも、「見どころ」あることが肝要なることと作者は考えているといえる。では、その「見どころ」はどのような性質のものか、次の例でみてみよう。

「賢木」、伊勢の御出立のほども艶にいみじ。院かくれさせ給ひてのち、藤壺の宮、さまかへ給ふほどなど、あはれなり。「須磨」あはれにいみじき巻なり。京を出で給ふほどのことども、旅の住ひのほどなど、いとあはれにこそ侍れ。「明石」は、浦より浦に浦伝ひ給ふほど。また、浦を離れて京へおもむき給ふほど。（25頁）

巻々の論における記述の仕方からみて、「見どころ」にあたるものは、「賢木」では六条御息所の伊勢出立、藤壺の出家、「須磨」では源氏の離京、旅住い、「明石」では明石への浦伝い、帰京である。これらは巻の中の一つの場面、一つの話しであって、巻全体からすれば、一部分にしかすぎない。伊勢出立や源氏離京の場面はもちろん時間の経過を含む一まとまりの話しであるが、巻全体からみれば、やはり一つの部分として位置づけられるべき性質のものである。全体を総括的に把えるのではなく、ある部分に焦点をあてて考えようとするのが、「見どころ」の姿勢である。

これに対し「ふしぶし」はより場面的であり、時間の経過を含まぬ空間的なものを指すものと思われる。「あはれにも、めでたくも心にしみておぼえさせ給ふらむふしぶし、仰せられよ」という問いに対し、次々と興あるふしを挙げていくが、たとえば、次のようにいう。

葵の上の失せのほどのことも、あはれなり。御わざの夜、父大臣の闇に迷ひ給へるなど、ことわりにあはれなり。鈍ばめる御衣を奉り換ふとて、我、先立たまひしかば、深く染め給はまし、などおぼして、

限りあれば薄墨衣浅けれど涙ぞ袖を淵となしける

と詠み給ふ所。

また、風荒らかに吹き、時雨うちしけるほどに、涙もあらそふ心地して、「雨となり雲とやなりけむ、今は知らず」と独りごち給ふに、頭中将参りて、

見し人の雨となりにし雲井さへいとど時雨にかきくらすかな

とある所（42頁）

右の「葵の上の失せのほどのこと」は、葵の上の葬送の話しをさすのであるから、時間の経過を含む、いわば「見どころ」と称してよいものであるが、その中でも心にしむふしとして、「……と詠み給ふ所」「……とある所」と限定される場面が挙げられている。引用は省略したが、「葵の上の失せ」の場合については全部で六カ所の場面をとりあげるが、そのいずれも、ある特定の一場面をさしている。「見どころ」が一まとまりの話し、場面であるのに対し、「ふしぶし」はより細かな、一場面をさしていると理解されるのである。「ふし」が集まって一つの「見どころ」となり、「見どころ」が集まって一つの巻となるという関係で認識されているといってもよい。源氏物語巻々の論では「見どころ」を中心に批評され、その

「見どころ」はふしぶしの論において、特定の場面々々で評されていることになる。物語にとって、「ことの趣き」が肝要だとする作者の考えは、このような場面中心的な形をとって展開されているのである。

六

『源氏物語』と『無名草子』にみられた、登場人物を実在する人物として受けとめる方法や、『枕草子』『無名草子』の「見どころ」論は、物語の現代化とでもいうべき点で通じている。昔語りを聞く姿勢とはよほど違ってくる。またそこに新しい時代の反映が認められるといえるし、そのような論理が不十分ながら展開されている様子は、物語論の一つとしてよみ解くことも可能ではないかと考える。もちろん物語論としては、これ以外の問題も考えなければならない。またこのような視点からすれば、たとえば『竹取物語』や『伊勢物語』などをどのように見、位置づけるかといった問題も出てこようが、これについては他日を期したい。

注

(1) 学習院大学国語国文学会誌第22号「物語の冒頭」
(2) 日本文芸学第16号　拙稿「玉鬘と髭黒大将の意外性」
(3) 『和田繁二博士古稀記念日本文芸伝統と近代』所収論文「無名草子の物語評」
(4) この他にも『今鏡』に「作り物語のゆくへ」の条があるが、ここでは、狂言綺語説とのかかわりで源氏物語を論じたもので、今ここではふれないでおく。なほ、これについては、論究日本文学第50号「無名草子の物語評(二)」でとりあげた。
(5) 『語文叢誌』所収拙稿「落窪物語の草子地」

—立命館大学教授—